

公益財団法人国際文化フォーラム

2022 年度 事業報告及び附属明細書



新型コロナウイルスの感染拡大から3年目となった2022年度は感染状況に慎重に対応しつつ、対面型の再開に踏み切り、オンライン型はその良さを最大限に活かして事業を実施しました。

「テンダーさんの『その辺のもので生きる』オンライン講座」は、2022年度に5つのプログラムを実施し、3年度14回にわたった連続講座を無事終了しました。最終年度の内容を考えるにあたっては、講座が終了しても、参加者がこれまで共有してきた考え方や技術を自分のものとして使いこなし、自身やコミュニティの問題解決に役立てていけるようになることを重視しました。そのため、参加者が実生活の課題を踏まえて自ら選んだ技術や思考方法を1ヵ月間実践する試みを行ったほか、周囲に働きかけながらものごとを変えていくための「交渉の技術」も扱いました。

「地球講座」はオンラインで実施し、日本、オセアニア、アジア諸地域、ヨーロッパからの参加者による各地域のLIVE中継やそれぞれの地域での自然災害、季節にまつわる地域文化についての報告に加え、デジタル地球儀SPHEREを活用した専門家によるレクチャーを通じて、ローカルな事象が地球規模でつながっていることを捉える好機となりました。

「多言語・多文化パフォーマンス合宿」は、対面型とオンライン型の2つのプログラムを実施しました。対面型では地域型交流の初の試みとして、広島県内の外国系住民が集住している地域で多文化共生を目指した地域づくりに尽力している様々な団体との連携を得て、安芸高田市を拠点として実施しました。テーマに「演劇×身体表現×ことば」を掲げ、アメリカで社会包摂、多文化教育のために開発された多文化演劇教育プログラム「I am from」を導入し、参加者一人ひとりの表現をいかしながらパフォーマンス作品をつくり発表しました。

また、オンライン型では、地球講座が掲げている「自分と地球のつながり」、「地球大のつながり」をテーマに取り入れ、韓国、中国、日本の高校生年代の参加者が、チームを組んで自分たちと地球のつながりを作品にする作業を通じて、言葉の壁を感じながらも新たな表現をつくりだすことに挑戦する機会となりました。

ロシアとの交流では、「日本語教材開発」並びに「日露の教師・生徒交流プログラム」を計画していましたが、ロシアによるウクライナ侵攻という事態を受けて、交流再開の目途が立つまで実施を延期することになりました。いずれにせよ、今後もロシアとの交流事業は取り下げず待機しつつける所存です。

2022 年度に実施した事業の一覧

ア. 国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業

1. 「学校のソトでうでだめし」プロジェクト テンダーさんの「その辺のもので生きる」オンライン講座
2. 地球講座 The LIVE
3. ネットワーク構築と情報収集

イ. ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発や提供事業

1. ときめき取材記ウェブサイトの運営
2. ロシアの日本語教材制作
3. ネットワーク構築と情報収集

ウ. 互いのことばを学ぶ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業

1. 日露の教師・生徒交流プログラム
2. 多言語・多文化パフォーマンス合宿(地域版)「パフォーマンス合宿 in 広島」
3. 多言語・多文化パフォーマンス合宿(オンライン版)「パフォーマンス合宿(オンライン版)×地球講座」
4. ネットワーク構築と情報収集

エ. 広報事業

1. 事業報告書『CoReCa』の発行
2. デジタル媒体を使った広報
3. ネットワーク構築と情報収集

公1 我が国と諸外国の児童及び青少年を対象とした外国語教育、並びに多様な文化についての理解を促進するとともに、教育及び文化の交流を推進する事業

予算額 104,280,603 円／実績額 104,635,395 円／収支差額 △354,792 円

内、公益目的事業共通費用（給料手当、福利厚生費、消耗品費、賃借料など）

予算額 73,792,699 円／実績額 74,518,122 円／収支差額 △725,423 円

ア. 国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業

予算額 11,748,213 円／実績額 10,123,865 円／収支差額 1,624,348 円

事業名	「学校のソトでうでだめし」プロジェクト テンダーさんの「その辺のもので生きる」オンライン講座					
経費	予算額	6,557,586 円	執行額	5,201,445 円	差額	1,356,141 円
収益	予算額	参加費 300,000 円 助成金 円	入金額	参加費 170,000 円 助成金 円	差額	参加費 130,000 円 助成金 円
差額発生 の事由	【経費】 ・講座で使用する材料のほとんどを参加者に調達してもらったため、主催者側で購入・送付するものがほぼ発生しなかった。 ・各講座のレポート執筆を 2023 年度に延期したため、執筆謝金が発生しなかった。 【収益】 各講座の材料をほぼ参加者に調達してもらい代わりに参加費の金額を低く設定したため。					
2022 年度の 事業	<事業の目的> 社会に多様な生き方や価値観が存在することが、排除や分断を生むのではなく、すべての人が自分の人生の選択肢を広げ、対等な関係性を築くことを後押しするような文化をつくる。その担い手として実際に行動する人が増えるための働きかけを行う。 また、日本では、国際情勢や経済の変化、AI の進化、人口減少、気候変動などの環境問題、感染症の拡大などにより、社会システムの大きな変容が現実味を帯びつつある。たとえ変化が激しく、複雑で困難の多い社会になったとしても、自分や周囲の問題を自分で扱い、解決できる力と自信を身につけ、希望をもって生きていく人が増えることをめざす。					
	<2022 年度の目標> 社会の格差や環境などの問題を根本的に解決することをめざして考えられた技術（講師が考案・開発）の体験を通して、次のような学びに取り組める場をつくる。 ・自分がどのような考えをもち、どんな行動をとるかが、目の前の他者だけでなく、直接には関わりのない遠い他者や次の時代を生きる人の生活環境と人生にどのように連鎖していくか、具体的に知っていく。 ・ものごとの複雑さを構造的に捉えた上で、課題の核心を明確にし、資本がなくても少ない力で効果的に解決するポイントを見出す思考方法を学ぶ。 ・課題を解決するためのアイデアやものを自ら創り出すための具体的な技術とものの見方を身につける。					

	・自分で観察し、観察して得た情報をもとに思考し、実践(実験)するサイクルを繰り返すあり方を学ぶ。 ・隠された暴力や搾取への気づきを高めながら、対等性を脅かさないための言語表現力を身につける。 ・学校で習った知識が実際の生活とどのように結びつくのかを体感し、自分の生活や問題解決に使える、意味をもった知識・技術として学び直す。 連続講座が完結する 2022 年度は、上記に加え、講座が終わった後も参加者がこれまでの講座で共有した技術や考え方を役立てていけるよう、学んだことを自分の日常生活に落とし込み、継続的に実践していくための働きかけを行う。また、自分の属するコミュニティや社会の問題解決にも当事者として関わり、他者に働きかけていくための技術も扱う。 <実施内容> ● 第 9 回「鉄工を身につけて強力なストーブを作ろう」 現代の工業社会は鉄製の機械による生産で成り立っており、生活で使う道具も乗り物もほとんどが鉄や鉄を主成分とした合金でできている。人類の「鉄器時代」はまだ続いているにも関わらず、多くの人は鉄を扱えない。この回では、講師が開発した調理用の「火熾(ひおき)ストーブ」を作りながら、鉄の特性と扱い方を学び、実用的な強度があるもの、耐熱性能があるものを自らの手で作り出す体験をした。火熾ストーブは、ガソリンスタンドで譲り受けたペール缶をリサイクルして作る上に、ほんの一握りの薪だけで強力な火力を維持できるなど、低コストかつ環境負荷が低い。薪を燃やして出た炭は、土にすきこむと CO2 による温度上昇幅を抑える効果があるという研究もある。また、ガスや電気などのインフラに問題が起きたとしても、問題なく調理できる。参加者のなかには日常の調理を火熾ストーブに切り替えた人たちもいる。この火熾ストーブは輻射熱などの熱の仕組みを極限まで効率的に使えるように設計されており、製作のプロセスは理科で習った燃焼の三原則や熱の伝わり方が実際にどのように作用するかを詳しく観察し、自分の生活に関わりがあり、自分でも役立てることができるものとして学び直す過程にもなった。 ● 第 10 回「きみのためのエネルギー。実用パラボラソーラークッカーを作って太陽熱で調理する」 太陽光は、1㎡あたり 1000W の仕事量(＝エネルギー量)があるとされている(中型ホットプレートを使っても余るほどのエネルギー量)。さらに、貧富の差に関係なく、どのような境遇の人にも等しく降り注いでいるものであり、電気やガスなどのインフラ料金の値上がりに左右されることもない。この回では、5000 円以下の費用で、かつ 2 人いれば 3 時間で完成できる超軽量のパラボラ型ソーラークッカーを作りながら、太陽光の利用方法を学んだ。また、熱を効率的に発生させるためにパラボラの適切な場所に太陽光の焦点を合わせるための考え方は、数学で習った二次曲線の理論であることを体感した。 ● 第 11 回「交渉を学び、こころざしを護る」 日本では学校で「交渉」の知識を学ばない。そのため、相手の意図を聞かずに問題を治めようとする習慣ができてしまい、大人になっても「説得」か「譲歩」、または「耐える」という方法に偏りがちである。この回では、大きな目的や志をもったときに、力や論理で相手をねじ伏せたり、相手を攻撃して非を認めさせたり、あるいは下手に出て譲歩を引きずり出そうとするのではなく、「お互いの視野を広げる」ことで、互いが従順にも安易にもならず、しょうがないと諦めることなく、他人と志を共有し、協働していくための交渉の技術(＝対等な関係を構築するための言語リテラシーなど)を扱った。脳の仕組みや非暴力の考え方も踏まえながら、自分がなにを望んでいるかを深く洞察し、相手のニーズを捉え、ことばを明晰にして率直に表現するワークなどに取り組んだ。 ● 第 12 回「生き物の輪に戻るためにドライトイレを作ろう」 世界の 4 人に 1 人はトイレを持たず、2 人に 1 人は安全なトイレ環境がない。国際的な取り組みで状況は大幅に改善されつつあるものの、今でも衛生的なトイレや公衆衛生の知識がないために 1 日に 5 歳以下の子ども 800 人が下痢で命を落としているというデータがある。一方、日本は高度な下水設備をもつが、有害物質すべてを取り除くことはできず、河川や
--	---

	海、地下水に流れ込んで問題を引き起こしたり、濾過後の汚泥の処理に地下資源が使われているという状況がある。さらに、人口減少が進む地域は下水設備の維持管理コストに対応できなくなっている。 この回では、トイレと格差の問題、下水の仕組みと課題などを学んだ上で、講師が開発した、水洗(下水)に依存しないドライトイレ「コヤッシー」を製作した。材料のPP(ポリプロピレン)シートは1枚 100 円程度で手に入り、廃棄の際も燃やせば水と二酸化炭素になるので公害を発生させない。かつ、ハサミで切り抜き、折り紙の要領で折れば誰にでも作れる。薄くて軽量なため、輸送と備蓄のコストも抑えられる。また、コヤッシーは、便(糞)と尿を分離する構造になっている。便はそのまま土に埋めると害を引き起こすが、尿は基本的に無害で窒素・カリウム・リンという栄養素を豊富に含む。尿は土や植物の特性にあわせて適切に希釈しながら有効活用し、便は日照で無毒化させる方法についても考察した。 コヤッシーは、講師が、トイレ環境が整わず子どもが下痢で命を落とす地域と、日本のように高度な下水設備を備えている地域、それぞれが抱える問題の構造を捉えたうえで考案したものである。その設計思想を通して、問題の構造を明らかにした上で効果的に解決するポイントを見つけて介入するシステム思考についても学んだ。 ●第 13 回「当たり前を変えよう、大切なものを守ろう」(最終回) 参加者がこれまでの講座で扱った技術のなかから自分が取り組みたいテーマを選び、1 ヶ月間実践を行なった。また、システム思考や交渉、共感的コミュニケーション、ドライトイレ、ロープ、火おこしなど、さまざまな実践に取り組むプロセスを、参加者用のコミュニティに日々投稿した。講座当日は、実践で達成できたことや課題、実践を通じて考えたこと、今後めざしたいことについて、参加者どうしで語りあった。また最終回は、「講師から習う」のではなく、「自分の責任で自分の学びを引き受け、取り組んでいく」ためのさまざまな仕掛けを行ったが、その意図とデザインの種明かしも講師から参加者に伝えられた。
	<成果> 上記の各講座を通じて、「楽しかった、おもしろかった」「考えさせられた」けれど「講座が終わったらおしまい」になるのではなく、その後も、自分の判断基準をつくり、自分や自分の属するコミュニティと社会の問題を構造的に捉えなおし、解決に向けて行動を起こしていくための知識や学び方、考え方、技術(=<目標>に掲げたもの)を、体験と座学の両方を通じて参加者と共有した。講座終了後も、参加者のなかには、システム思考や交渉の技術を職場や家族、地域での問題解決に活用したり、中学校の探究活動として火おこしに 3 年間取り組むプロジェクトをスタートさせたり、雨水タンク、ドライトイレ、火熾ストーブ、ロープワークを日常的に使うなど、講座で学んだことを実際の行動に移している人が少なからずいる。具体的な実践に取り組んでいる参加者ほど、参加者どうしで実践の工夫についての情報交換も続けている。 ・参加者の反応 「講座に参加するための準備段階で、やったことのないことをやってみる必要性に迫られる(ガソリンスタンドに向いて不要なペール缶を譲ってもらい、市民工房を探してレーザーカットをする、など)という、自ら合意した、ある程度の強制・チャレンジがあり、それを自分でこなしたことが大きな学びになった。そういう準備を経て参加した講座では、テンダーさんのものの見方や考え方という伴走がつくことでまた視野が広がり、自分の普段の思考パターンの外をのぞくことができた」など、当事者として自ら動いていく経験や新しい視点・考え方の獲得について言及する声が多かった。また、「全講座のアーカイブ動画を買いたいくらいだが、今は動画の販売を要求するのではなく、自身で実践を深めて、他の人に伝えられるよう講座を開けるくらいのレベルを目指すのが正しい方向だろうという気がしている。これからは、自分の行動に希望を持てるように、多様な人がいることを知るために学びたい」など、「受け手」から「伝え手・自ら動く人」になることを自覚的に選びとろうとする参加者も少なくない。

	・広がり 講座の続編を希望する声が多く寄せられているほか、参加者の要請によりヨーロッパの日本語教師向けにシステム思考や交渉のワークショップを実施することが決まっている。また、講師が参加者の勤務校に招かれて探究型の特別授業を行うなどの広がりも見せている。
	＜課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか) 参加者からは「学校で学べないことだからこそ、中高生にぜひ参加してほしい」「自分が中高生のときに参加したかった」という声が多く寄せられるものの、中高生参加者の獲得には難しさを抱えている。2022年度は、子どもたちに関わる大人たちが変化することと、かれらを通じて子どもたちに講座で伝えようとした考え方や技術、あり方が伝えられていくことを重視する方向に転換した。＜成果＞に書いた通り、実際に学校や地域活動で、あるいは自分の子どもに学んだことを伝えていこうとする参加者は多い。 週末の部活動なども含めて中高生が多忙であることが要因のひとつだが、このオンライン講座は自主性を重視することもある。講座当日までの準備に求められるものが多く、それがハードルにもなっている。今後、講座の趣旨を損ねたり、質を落とすことなく中高生にアプローチするには、対面での開催が鍵となると考えられる。2024年度に向けて対面でのプログラムの可能性を探る。
事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等) 対象:国内外の中学生～大人 講師・企画広報協力:テンダー氏(環境活動家、一般社団法人その辺のものです生きる代表理事) 参加者数(延べ):162名 実施形態:オンライン 参加費:有(一部、無料) 実施主体:TJF 主催 1. 第9回「鉄工を身につけて強力なストーブを作ろう」 実施日:2022年6月5日、参加者数:33名 2. 第10回「きみのためのエネルギー。実用パラボラソーラークッカーを作って太陽熱で調理する」 実施日:2022年8月21日、参加者数:44名 3. 第11回「交渉を学び、こころざしを護る」 実施日:2022年10月2日、参加者数:45名 4. 第12回「生き物の輪に戻るためにドライトイレを作ろう」 実施日:2022年12月25日、参加者数:20名 5. 第13回「当たり前を変えよう、大切なものを守ろう」(最終回) 実施日:2023年3月26日、参加者数:20名	

事業名	地球講座 The LIVE					
経費	予算額	4,010,627 円	執行額	3,862,205 円	差額	148,422 円
収益	予算額	参加費 助成金 円 円	入金額	参加費 助成金 円 円	差額	参加費 助成金 円 円
差額発生 の 事由	8月と2月に予定していた講演とワークショップからなるプログラムをとりやめ、6月と12月に予定していた日の入り中継と講演及びグループワークからなるプログラムの環境整備(同時通訳者の配置、提示物の映像配信支援など)を行うことにした。結果、上記余剰金が発生した。					

2022 年度の 事業	<事業の目的> 世界が抱える課題は複雑さを増しており、その解決のためには国や地域をこえて地球上の隣人とその課題を共有したり協力しあう関係性の力(「地球大の関係力」)が必要となっている。そこで、世界の青少年の「グローバル」に対する理解を国際から地球へと更新し、地球の目線を持って異なる他者とのつながりを体験する機会を提供する。
	<2022 年度の目標> 参加者がプログラム終了後に、「地球大の関係力」に意識的になっていること。
	<実施内容> 夏至と冬至それぞれの 18 時から約 2 時間、以下の 1～3 の内容を地球講座 The LIVE「夜のリレー」と題してオンラインで実施した。 1. 日の入り中継 現地の高校や大学に通う学生特派員が中継する、各地の日の入りの空の様子を、インタラクティブ地球儀「SPHERE」(以下 SPHERE)に投映されるリアルタイムの雲の流れや昼と夜の境(日影線)の傾きなどを参照しながら眺め、LIVE(生中継)の醍醐味を共有する。 学生特派員の中継地域 【夏至】 6 月 22 日 メルボルン、パース、広島、ソウル、上海 【冬至】 12 月 22 日 エジンバラ、北海道、ソウル、メルボルン、コタキナバル、上海 2. 学生特派員による現地レポートと講師の解説 各地の学生特派員が自分の地域の季節や暦にまつわる行事、身近に起きた気象現象についてレポートし、それを受けて文化人類学者である講師の竹村眞一氏が、地域の行事をそれぞれの季節に起きる気象の変化から読み解いたり、SPHERE に搭載されているさまざまコンテンツ(例: インド洋から東アジアに運ばれる水蒸気の流れ、衛星で観測された森林火災の様子、温暖化シミュレーションなど)を活用しながら地球上に起きている事象を特定の国や地域にとどまらないグローバルな視点から解説した。 学生特派員のレポートの内容: 【夏至】メルボルンの冬至祭り、広島と上海の大雨、パースとソウルの山火事 【冬至】エジンバラの大晦日のお祭り、北海道とソウルの大雨、長江(揚子江)の干ばつ 3. グループワークと全体シェア 地球についての関心事やテーマについての考え・意見をグループ内で交換した後、全体でシェアした。 【夏至】 3つのグループに分かれ、学生による各地のレポートと竹村氏の解説を踏まえて意見を交換した。グループワークでは、1)海面上昇の問題、2)蜜蜂の大量死と気候変動、3)地球の将来についての不安と将来、4)他の惑星への移住は可能か等が主な話題となった。一つの懸念や課題に対しても認識の違いがあることや、地球規模の変化は自分の身の回りにとどまらず、大きな影響があることを共有する時間となった。 【冬至】 「食糧」「エネルギー」「自然との共生」をテーマに設定し、参加者自身が関心のあるテーマを選んでグループに参加し、考えや意見を交換した。「食糧」のグループでは、農業をいかに継続するかについて、水不足や高齢化の問題から社会(経済)への影響まで意見が交わされた。「エネルギー」のグループでは、生活圏(都市-郊外)によってエネルギーの価値が変化するという気づきが参加者間で共有された。「自然との共生」のグループでは、北海道とソウルという異なる地域で同じ時期に降った雨や雪を話題にすることで、気象現象を地球の目線で捉えることについて認識できた。

	<成果> 世界各地の日没の様子を学生特派員のレポートによりリアルタイムで共有し、竹村氏が SPHERE を使ってローカルニュースをグローバルに捉え直す解説を行った後、グループワークを実施した。その結果、参加者から「いろいろな国から人が集まってそれぞれの状況や気象について説明してくれたことで、地球温暖化が引き起こす現象についての理解が深まりました」「地球全体という視点が面白いと感じました」「少なくとも何十人かの学生が地球について考えているということを今回知ることができたので、自分自身も周りの人を巻き込みながら地球
	について考え続けたいと思います」といった声が寄せられた。参加者の視野が国から地球へと広がり、地球をテーマに新たな関係性を構築したいという参加者も出てくるなど、「地球大の関係力」に意識的になるという本事業の目標は達成された。
	<課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)> 当初の計画では、最終的に「私たちの地球」というテーマの作品を発表することを目指していたが、1 回 2 時間という時間設定の中では、参加者が共同で作品を創る作業を組み込むことは難しかった。 2023 年度は、講座の内容についてグループワークで対話を重ね、未来の地球について共に考え、メッセージなどにまとめて発表したりするプログラム構成を考えたい。
事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等) 対象：主に 12～19 歳の国内外の中高生 実施日：2022 年 6 月 22 日(夏至)、12 月 22 日(冬至) 講師：竹村眞一氏（特定非営利活動法人 Earth Literacy Program(ELP)代表、京都芸術大学教授） 学生特派員：夏至 5 人、冬至 6 人 グループワーク協力者：冬至 6 人 参加人数：夏至 60 名、冬至 82 名(日本・韓国の中高生、中国の高校生、オーストラリアの高校・大学生) 実施形態：オンライン 参加費：無 実施主体：TJF 主催 企画制作：特定非営利活動法人 Earth Literacy Program(ELP)	

事業名	アの事業に関するネットワーク構築と情報収集					
経費	予算額	1,180,000 円	執行額	1,060,215 円	差額	119,785 円
収益	予算額	委員謝金 0 円 助成金 円	入金額	委員謝金 194,846 円 助成金 円	差額	委員謝金 △194,846 円 助成金 円
差額発生 の事由	外部プロジェクトの委員を引き受けたため、その報酬が収益として発生した。					
事業概要						
アの事業に関連する学会、団体等への会費等支出に加え、会員のネットワークを活かした情報収集と TJF 事業の広報を行った。また、情報収集や研修のため、職員が外部セミナーに参加したほか、TJF 内部の勉強会を実施した。						

イ. ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発や提供事業

予算額 2,409,600 円／実績額 999,580 円／収支差額 1,410,020 円

事業名	ときめき取材記ウェブサイトの運営					
経費	予算額	314,600 円	執行額	348,970 円	差額	△34,370 円
収益	予算額	0 円	入金額	講師謝金 106,499 円	差額	△106,499 円
差額発生 の 事由	大学等から講師の依頼を引き受けたため、その報酬が収益として発生した。					
2022 年度の 事業	＜事業の目的＞ 若い人たちが、文化や社会を多面的に捉え、多様な考えをもつ人たちと積極的に関わる体験の場を提供する。 具体的には、ときめき取材記プロジェクトに参加した学生が、テーマを考えることで社会を多面的に見つめなおし、インタビューとじっくり向き合うことで、自分と異なる意見や考えを聞き、相手のことばを受け止め、自分が無意識に持っている「文化」への思い込みや偏見に気づき、「文化」を新しい視点で捉えるようになること。またウェブサイトの記事を掲載することで、表現力を身につけるとともに、情報の発信に責任をもつということへの意識を高めてもらうことをめざす。					
	＜2022 年度の目標＞ これまでは各教師が主体となってプロジェクトを実施し、TJF は教師と協力してプロジェクトのプロセスで生じた問題の解決をはかったり、学生の記事の掲載前に改善・修正点を指摘したり、インタビューのウェブ掲載承諾書を得てウェブに掲載するなどのサポートをしてきた。 2022 年度は、ときめき取材記プロジェクトが自律的に発展することと、実践者を増やすことを目標とする。そのために、ウェブへの投稿までのしなやかをつくり、これまでの素材を整理し提供する。					
	＜実施内容＞ ・ときめき取材記プロジェクトの一連の活動で必要かつ役立つ資料を整理するとともに、ウェブサイト掲載までの資料や流れをまとめて、実践者と共有した。 ・ビジネスチャットツール Slack を利用して、プロジェクトに取り組んでいる教師、これまでの勉強会やワークショップ参加者をメンバーとするグループを立ち上げ、それぞれの資料や経験などを共有できるようにした。 ・2021 年度に発行したときめき取材記報告書に、2 つの実践を加えた増補版を制作し PDF で発行した。					
	＜成果＞ ・記事掲載にいたるまでの一連の活動が実践者主体で行われるようになり、完成した記事・画像・承諾書のすべてが TJF に送付された後、TJF が確認を行ったうえで、ウェブサイトに掲載するという流れができた。 ・Slack のグループで資料だけでなく経験や進捗状況の共有などが図られたことにより、新規の実践者もプロジェクトを進めることができた。 ・報告書で国内外 8 つのさまざまな実践を掲載したことで、プロジェクトのさまざまな活用の仕方を提示できた。					
	＜課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)＞ ときめき取材記プロジェクトの継続、発展につながるようなウェブサイト運営を検討する。					

事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等)

・ときめき取材記プロジェクト実践校

秋田大学、大阪大学、大阪大谷大学、京都教育大学、成城大学、摂南大学、法政大学、武蔵野美術大学、NZ カンタベリー大学等

・ウェブサイト掲載記事 23 本

・『〈対話〉をつくる「ときめき取材記」プロジェクト報告書 2023 年増補版』

発行日:2023 年 4 月 1 日

判型:B5 判、91 ページ、PDF 版をウェブサイトに掲載

事業名	ロシアの日本語教材制作					
経費	予算額	1,455,000 円	執行額	0 円	差額	1,455,000 円
収益	予算額	参加費 円 助成金 1,000,000 円	入金額	参加費 円 助成金 0 円	差額	参加費 円 助成金△1,000,000 円
差額発生 の事由	事業を実施しなかった。それに伴い、計画時に計上した助成金申請額 100 万円(尚友倶楽部)については申請しなかった。					

事業名	イの事業に関するネットワーク構築と情報収集					
経費	予算額	640,000 円	執行額	650,610 円	差額	△10,610 円
収益	予算額	参加費 助成金 円 円	入金額	参加費 助成金 円 円	差額	参加費 助成金 円 円
差額発生 の 事由						
事業概要						
イの事業に関連する学会、団体等への参加を継続するとともに、そのネットワークを活かした情報収集と TJF 事業の広報を行った。						

ウ. 互いのことばを学ぶ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業

予算額 8,006,900 円／実績額 11,513,794 円／収支差額 △3,506,894 円

事業名	日露の教師・生徒交流プログラム					
経費	予算額	1,934,800 円	執行額	59,580 円	差額	1,875,220 円
収益	予算額	参加費 助成金 円 円	入金額	参加費 助成金 円 円	差額	参加費 助成金 円 円
差額発生 の事由	事業は実施しなかった。ただし、2021 年度に実施したプログラムに関連した書籍等の送付が配送環境等の事情により 2022 年度にずれ込んだことから、費用が発生した。					

事業名	多言語・多文化パフォーマンス合宿(地域版) 「パフォーマンス合宿 in 広島」(ひろしま PCAMP2022)					
経費	予算額	3,444,600 円	執行額	9,398,996 円	差額	△5,954,396 円
収益	予算額	参加費 助成金 円 円	入金額	参加費 助成金 円 円	差額	参加費 助成金 円 円
差額発生 の事由	【本番の実施費用の増加】 ・ファシリテーターと運営スタッフを増員した。 ・コロナ感染拡大により感染予防対策費が増えた。 【次年度に向けての広報企画を実施】 ・広報用のチラシの作成と専用の WEB サイトのリニューアルを追加で実施した。 ・次年度開催のイベントとして「公開報告会及び体験ワークショップ」を実施するための企画・準備を新たに行った。					
2022 年度の 事業	＜事業の目的＞ 多文化化が進む日本において、海外につながりをもつ子どもたちへのサポートは年次の低い学年がより重視される傾向があり、高校生年代の人が受けられるサポートは、小中学生と比べると多くない。高校生年代では、入学後も、学習や進路などでさまざまな困難に直面している。また、同じ学校に通う生徒どうしてもつながりが薄く、孤立感を深めやすく、他の生徒と交流する機会も十分あるとは言えない。そこで、生徒たちがお互いのことをより深く知り、つながりをつくっていけるよう、表現活動をとおして対話や協働を体験するような機会を提供する。また、国内外のさまざまな背景をもつ同年代どうしが交流することで、より多様な人たちと対話をし、互いの理解を深める体験の機会を提供する。 ＜2022 年度の目標＞ 外国系住民が集住している地域の NPO 及び地域行政と連携し、地域型交流(対面)のモデル開発を行う。モデル開発を通して、地域のネットワークと資源を生かしながら多文化共生を目指した地域づくりや、地域活動の持続的発展を担う人材の育成などに貢献することを目指す。 ＜実施内容＞ 2022 年度のプログラムのテーマは「演劇×身体表現×ことば」と定め、アメリカで社会包摂、多文化教育のために開発された「I am from」プログラムを中心に据え、ダンスワークも取り入れ					

	ながらパフォーマンス作品をつくり、最終日に発表することをゴールにした。開催地については、本事業の第二回目の参加者とのつながりから広島県安芸高田市を中心に、外国系住民が集住している周辺の市との連携も図って実施した。 ●事前課題: 言語レポートの作成 本番に先立ち、参加者の多様な言語的・文化的バックグラウンドやアイデンティティに意識を向けてもらうために、各参加者にとって大事な言語、よく耳にする言語、町で目にする言語、自分をより表現できる言語、学んでみたい言語など自分と関係のある言語を書きだして、自分の身体を模した絵の中に配置してもらう「言語ポートレート」作成に取り組んでもらった(本番当日、会場に展示した)。 ●初日 全員が全身を動かし、互いの身体を近づけながら心理的距離も縮め、声を出し、身体を動かすことで緊張をほぐすウォーミングアップ中心の活動を行った。 ●2日目 グループに分かれてダンスをつくり、「I am from」のキーワード書き出しを通して各参加者の内面から掘り起こしたエピソードを基にシナリオづくりを行った。 ●3日目 ファシリテーターによる構成・演出にそって作品の仕上げとリハーサルを行った。 ●最終日 「発表会」ではチームダンス、全体ダンス、そして「I am from」の朗読劇を行った。 <成果> ・安芸高田市、呉市、福山市、東広島市において多文化共生活動に取り組む市民団体に参加者募集などに協力してもらい、広島県内から中国、日本、ネパール、バングラディッシュ、フィリピン、ブラジルにつながりを持つ28名の多様な中高校生参加者を得た。 ・現地の人材活用及び人材育成の一環として広島市を拠点に活動する芸術団体「無色透明」からサブファシリテーターを2名派遣してもらうことができた。 ・アメリカで開発された多文化演劇教育プログラムをベースにしたパフォーマンスプログラムの一つのモデルを提示することができた。 ・発表会には参加高校生の家族、学校関係者をはじめ地域の住民などが多く来場し見学したことで、地域のより多くの方々にこのPCAMPを知ってもらうことができ、今後の協力の可能性にもつながった。 ・アンケートからは参加者の変化として次の2点がうかがえた。 - 楽しさや嬉しさを感じたのは、友だちができたこと。「これからも続いていきそうな大事な仲間ができたこと」「人との繋がりが伸びていったら結ばれていくのが見えたこと」という回答からは、4日間で互いの関係性が深まったことがわかる。 - 「お互い自己表現をしてみて、だんだんと何も知らない相手を尊重したり、理解したりできるようになった。自己開示をすることは人と人をつなげるんだなと感じた」という回答にも見られるように、多くの参加者が参加前に比べて積極的にコミュニケーションをとるようになった。 <課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)> 地域版の初年度である2022年度は、TJFの働きかけに応じて広島各地域の諸団体が協力する形での開催だった。今後は、地域により主体的に関わってもらうことで、プログラムの定着と継続的な実施につなげたいと考えている。そのために、PCAMP参加経験者を含むより若い層が運営に参加できるよう働きかけと環境整備を続ける。また、TJF以外の資金提供者を探す努力も行う。
事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等) 主催: TJF 共催: NPO 法人安芸高田市国際交流協会(AICA) 後援: 安芸高田市、安芸高田市教育委員会、広島県教育委員会	

協力:こどものひろばヤッチャル(東広島市)、ひまわり 21(呉市)、びるど(福山市)、
ワールド・キッズ・ネットワーク(呉市)、公益財団法人東広島市教育文化振興事業団

期間:2022 年 8 月 4 日～7 日

場所:安芸高田市甲田文化センターミュージズ、安芸高田多文化共生センターきらり

参加者:広島県在住中学生 5 名、高校生 22 名、岡山県在住*高校生 1 名の計 28 名

(中国、日本、ネパール、フィリピン、バングラディシュ、ブラジルにつながりをもつ中高生)

*2021 年春オンライン合宿参加経験者で、今回はサポーターの役割を兼ねた。

ファシリテーター:柏木俊彦氏(演出家・舞台俳優、東京より派遣)、田畑真希氏(振付家・ダンサー、東京より派遣)、森永明日夏氏(舞台俳優・ティーチングアーティスト、ニューヨークより招聘)

サブファシリテーター:江島慶俊氏(俳優、開催地在住)、坂田光平氏(俳優・舞台美術、開催地在住)

撮影・記録:菊井博史氏(フォトグラファー、開催地在住)、山泉貴弘氏(映像ディレクター、東京より派遣)

発表会協力:

照明:永尾良三氏(開催地在住)、

音響:下岡正宏氏(開催地在住)、濱原多孝氏(開催地在住)

サポーター:邵帥氏(大学院生、東京)、古田小桜氏(高校生、岡山)

事業名	多言語・多文化パフォーマンス合宿(オンライン版) 「パフォーマンス合宿(オンライン版)×地球講座」					
経費	予算額	1,777,500 円	執行額	1,193,090 円	差額	584,410 円
収益	予算額	参加費 円 助成金 500,000 円	入金額	参加費 円 助成金 500,000 円	差額	参加費 円 助成金 0 円
差額発生 の事由	実施日数を短くしたことにより、ファシリテーターや協力者への謝金が予算額を下回った。					
2022 年度の 事業	<事業の目的> 若い人たちが、多様な背景をもつ人たちと文化やことばの違いを越えて対話を重ね、互いの理解を深め、それぞれの個性や創造性を発揮しあうとともに新しい価値を創り出しながら自他の可能性を切りひらいていくための糧となる経験の場を提供する。					
	<2022 年度の目標> パフォーマンス合宿の核である「多様な背景をもつ高校生年齢の若い人たちが違いを越えて対話し、互いの理解を深め、それぞれの個性や創造性を発揮しながら新しい価値を創り出す」プロセスと、地球講座がテーマに掲げる「自分と地球のつながり、地球大のつながり」の体感を効果的にかけ合わせ、中高生がグローバルな視点に立って、今地球で起きている現象にはどのような連鎖があるのか、また、お互いの存在がつながり合い、影響を与えあっていることを、実感をもって理解できるようなプログラムを提供する。					
	<実施内容> ●事前交流 2日間の交流活動を円滑にそして、活発にするために、事前に、チャットツール Slack を使い、参加者が自己紹介をしたり、互いにコミュニケーションできるようにした。また、「自分と地球・自然に関する写真」というタイトルで写真 1 枚を提出してもらった。 ●プログラム1日目 1) 自己紹介とアイスブレイクのアクティビティ					

	2)「地球大のつながり」レクチャー 国や地域を越え、地球の目線から見ると自分たちはどのようにつながっているのか、“地球大”のつながりを体感できるように、講師の竹村眞一氏がインタラクティブ地球儀「SPHERE」を活用したレクチャーを実施した。その後グループ毎にレクチャーを受けて感じたことや考えたことを絵やジュスチャーなどの様々な方法で表現し共有した。 3)レクチャーの理解を深めるために、各自の思い出に残っている自然について2人1組で話した。 4)「We are from」の詩を作成 アメリカのシアターエデュケーションの現場で行われている多文化演劇教育プログラム「I am from」をベースに、主語を「We」に変えて、自分と地球のつながり、みんなとのつながり、自分たちがひとつの地球を共有しているということを一人ずつ詩で表現した。 ●プログラム2日目 4・5名のチームに分かれ、前日に作成した詩を元に身体表現・造形表現・音楽・写真などを組み合わせてひとつの表現作品を制作する作業に取り組んだ。制作した作品を発表した。 ＜成果＞ 参加者の振り返りコメントには、「いろんな国の人、ちがった文化を持った人に出会えて、今まで考えられなかったことも浮かんできたりして、いい経験になった」「3つも違う国の人がいって、うまくいか怖かったけど、ほかの国のひとたちが自分の国の言葉の話そうとしてくれているのを見るとすごい嬉しくて、だから自分も、中国語、韓国語に興味が出た。これから勉強していこうかなと思った」「最初ははずかしくてどうなるかと思ったけど、みんなが我慢強く話すのを待っていて嬉しかった。これから日本語をもっと勉強してもっとみんなと仲良くなりたい」などと書かれていた。 また、終了後に実施した振り返りシートには、「プログラムに参加して伸びたと思う力」の質問に対して、言語やコミュニケーション力、反応を大きくすることなどが多くあがった。 このことから、1) 同じチームに多様な価値観や考えを持っている人がいることを認識し、より多角的な視点で物事を見られるようになったこと、2) チーム内にいる、自分とは異なる言語・文化的背景を人に、自分の考えを伝えるためのコミュニケーション能力など表現する力に意識的になっていることがわかった。 ＜課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)＞ 言語・文化背景の異なる参加者が国内外から参加したため、コミュニケーションが難しい場面があった。活動の内容が十分理解できないまま作業が進んでしまうこともあったため、今後は必要に応じて、言語のサポートをしたり、ことば以外の表現方法を積極的に使えるような環境を整えたい。
	事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等) 対象：15歳～19歳(高校生年齢) 計20名(多様な文化的・言語的背景のある高校生) 実施日：2023年2月25日、26日 ファシリテーター：森永明日夏氏(舞台俳優・ティーチングアーティスト) レクチャー講師：竹村眞一氏(特定非営利活動法人 Earth Literacy Program(ELP)代表、京都芸術大学教授) サポーター：本プログラム経験者等の高校生や大学生 5名 参加者数：18名 実施主体：TJF 主催 協力：特定非営利活動法人 Earth Literacy Program (ELP) 助成：公益財団法人三菱 UFJ 国際財団

事業名	ウの事業に関するネットワーク構築と情報収集					
経費	予算額	850,000 円	執行額	862,128 円	差額	△12,128 円
収益	予算額	参加費 助成金 円 円	入金額	参加費 助成金 円 円	差額	参加費 助成金 円 円
差額発生 の 事由						
事業概要						
ウの事業に関連する外部ネットワークとのつながりを活かした情報収集と TjF 事業の広報を行った。						

エ. 広報事業

予算額 8,323,191 円／実績額 7,480,034 円／収支差額 843,157 円

事業名	事業報告書『CoReCa』の発行								
経費	予算額	5,555,000 円		執行額	4,827,560 円		差額	727,440 円	
収益	予算額	参加費 助成金	円 円	入金額	参加費 助成金	円 円	差額	参加費 助成金	円 円
差額発生の 事由	35 周年記念鼎談のページを作成しなかったため。								
2022 年度の 事業	<事業の目的> TJF のステークホルダーに向けて事業の報告を行う。また、ステークホルダーおよび TJF の事業に関心をもつ教育関係者等に活動趣旨への理解を深めてもらい、継続的な支援、協力につなげる。								
	<2022 年度の目標> 同上								
	<実施内容> 2021 年度に実施した事業を詳細にレポートするとともに、財政状況等の報告を行なった。								
	<成果> 4,500 部を発行し、事業の支援者・協力者・参加者のほか、国内外の教育関係者に広く配布した。また、より多くの人に読んでもらえるよう、PDF 版をウェブサイトに掲載した。								
	<課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)> 今後の情報発信媒体の動向を見極めながら、事業の報告のあり方について検討を行う。								
事業概要 (対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等) 対象: 寄付者、事業協力者、事業参加者、国内外の教育関係者など 発行日: 2023 年 3 月 発行部数: 4,500 部(仕様: A4 変形、48 ページ)									

事業名	デジタル媒体を使った広報					
経費	予算額	2,368,191 円	執行額	2,346,443 円	差額	21,748 円
収益	予算額	参加費 助成金 円 円	入金額	参加費 助成金 円 円	差額	参加費 助成金 円 円
差額発生 の 事由						
2022 年度の 事業	<事業の目的> TJF の活動趣旨と事業について、関心をもつ人たちに広く情報が届くよう発信活動を行う。					

	<2022 年度の目標> ウェブサイト、メルマガ、SNS を通じた発信を継続的に行うとともに、発信を効果的に行えるよう環境整備を行う。					
	<実施内容> ・ウェブサイト、メルマガ、SNS を通じて、財団の活動趣旨、各事業のプログラムの開催情報および報告等を継続的に発信した。 ・ウェブサイトの事業の告知・報告に関わるページについて、マニュアル作成などを行い、各事業担当者が自らページを制作できる環境を整えた。 ・ウェブ解析ツールを利用して TJF サイトの各 Web ページへのアクセス情報を収集し、大体の傾向を把握するとともに、事業の告知等に活用した。 ・メルマガ発信ツールやウェブ解析ツールを最新版にバージョンアップするなど、情報発信・収集環境の整備を行なった。					
	<成果> 上記<実施内容>にある通り、TJF の活動について継続的に発信活動を行なったほか、情報発信の利便性を高めるための環境を整えた。					
	<課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)> デジタル媒体を通じた情報があふれるなかで、情報を受け取ってもらうことが難しい時代になっている。また、学校外の教育プログラムの数も、発信される情報量(募集情報など)も増加しており、多忙な中高生や教育関係者に TJF の情報を受け取ってもらうには、同じ情報を一律に幅広く流す広報の手法や、単純な画像・動画やことばの表現の工夫だけでは解決が難しいのが現状である。事業の目的の明確化と、目的に基づいた対象者の吟味がなされた上で、各事業ごとに対象者に焦点を合わせた広報戦略が必要となってきた。当面は、TJF の中期計画に基づいた事業改革の動向を見極めつつ、新たな情報発信のあり方について適宜情報収集を行っていく。					
	事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等) 対象:TJF の事業の協力者・参加者、教育活動に関心をもつ人たち、多様性が尊重され、活かされる社会の構築に関心のある人たち メルマガ「わやわや」登録者:約 2,350 名 Facebook フォロワー数:約 2,450 名					

事業名	エの事業に関するネットワーク構築と情報収集								
経費	予算額	400,000 円		執行額	306,031 円		差額	93,969 円	
収益	予算額	参加費 助成金	円 円	入金額	参加費 助成金	円 円	差額	参加費 助成金	円 円
差額発生の 事由									
事業概要									
エの事業に関連する外部ネットワークとのつながりを活かした情報収集と TJF 事業の広報を行った。									